

同化—自然を愛でる

“自然の与える五感は移り変わるが、文明の与える五感は凍結されている。”

言うまでもなく、人間は、他の動植物と同様に自然の構成要素の一つです。人間は、その優れた4次元的認知機能によって、自分自身が、自然の一部であることを客観的に認知することができます。果てしなく続く地平線や水平線は、我々が広大な球面上の一粒であることを思い出させてくれます。暗闇に輝く無限の星のきらめきは、宇宙の果てに思いを巡らせ、その無限と人間分子の儂さのあまりの対比は、我々に心地よい不安を抱かせます。一定のリズムを刻みながらも崩れるたびごとに微妙に変わる波の音、揺らぎながら頬を優しくなでる春風、季節により装いを一変させる草花やその芳香、深くなる闇と静寂の中で微かな音と明るさを携えながら降り積もる雪……。古今東西の人間分子は、例外なく花鳥風月を愛でることによって癒されてきたのです。災いと恵みを交互に繰り返しながら、そのたびに微小と無限が調整しながら、絶え間なく進行する自然のメカニズムを考えれば、自然の構成要素間の調和は必然なのです。とすれば、自然との同化に幸福を得ることができるのは人間分子だけではないでしょう。4次元的認知機能の有無に関わらず、それらを持たない動植物にとっても、自然の恵みは物理的に好ましいものなのでしょう。ましてや、人間分子は、時空間的に移り変わりながら動的平衡を保つ自然の佇まいを4次元的に認知し、その壮大なメカニズムの中に自分を位置づけることができる唯一の動物です。創造力は膨らみ、よりいっそう幸福感を増幅することが可能です。

自然が常に幸福をもたらす福音であると言っているのではありません。1枚のカードが表と裏をもつように、1つの事象は必ずプラスとマイナス、光と闇、を併せ持ちます。表裏平均すればゼロとなるのですから、1枚のカードには良いも悪いもありません。ただし、光が強ければ闇も深いように、対照する2相の符号は正反対ですが、それらの絶対値は同じです。交流電流のように入れ替わる自然の恵み（光＝プラス）と災い（闇＝マイナス）をあらかじめ織り込んだうえで、災いに耐え忍び、恵みを享受する。災いが大きいほど、恵みのありがたさも大きい。そのような循環の思想を受け入れることによって、恵みに反転した際の束の間の自然との同化の幸福を実感できるのです。第一章で述べた通り、欧米は、自然と人間を分離・区別する2元論を取ってきました。両者は並列ではなく、人間ファーストの思想です。それは比較的穏やかな自然環境によるものであり、そもそも自然のもつ光と闇のコントラストが小さいのです。彼らにとって自然は征服・制御した上で、大切に保護して愛でるものです。より高い価値を置くべきものは、自然ではなく人間・人知が成し遂げたピラミッドであり、大聖堂であり、ローマの街並みであり、法であり、社会・経済システムです。アジア、とりわけモンスーン地域は、地震・噴火・水害など災いの坩堝です。強大なインフラによって一見自然を抑え込んでいるように見える現代でさえ、我々アジアの自然観の根底には多元論があります(1-1節参照)。人間は多様な自然の一構成要素に過ぎません。自然は大きな乱流渦のようなもので、それ自体は人間には制御不可能なのです。大きな乱流渦の流れをモニター・予測して、刹那、刹那に、微細な人間分子の取りうる道を見出す対処療法なのです。時空間的に人知の及ばない大規模な乱流渦に逆らわずに、むしろその循環の流れの中にどっぷりと身を任せて、自然同化による幸福の恩恵にあずかることが幸福を当てる内的要因の1つです。

無人島で生き延びようとする孤独な人間分子について考えてみましょう。洞窟の中で一人震えながら、荒れ狂う暴風をやり過ごした人間分子は空腹に耐えかねて、数日ぶりに穴の中から這い出してきました。アホウドリを撲殺して貪り食べ、飢えが癒えます。命の危険がひとまず去り、冷静さを取り戻したとき、その極現状況は耐え難いほどの絶望を与えたことでしょう。満天の星空、水平線に沈む夕日、夜風にそよぐ穂波の音……。あまりあまる時間を、あまりあま

る穏やかな自然の恵みで少しは慰めることが可能だったのでしょうか。そんなものは何の慰みにもならぬと絶望の道を歩むか、自然同化の心得を持って実践し、わずかな慰みと刹那の幸福であったとしても、そこにわずかな希望の道を見出せるか、生死の分かれ道となったのではないのでしょうか。

我々が五感によって精神充足を得ようとする時、自然の与えるものと、文明の与えるものとは本質的な違いがあります。それは、時空間における変化、です。自然の与える五感は移り変わりますが、文明の与える五感は凍結されています。山林の樹木の葉ぶりや色は、日々移り変わりますが、林立するビル群の有り様は、変わりません。小さな庭のハーブは、日々成長し、収穫されれば、また伸びてきますが、スーパーで調達した冷蔵庫のハーブは、品質を落としながら食されることをひたすら待っています。海風は、日々その強さや匂いを変えますが、部屋の冷房は、同じ風の揺らぎを与えるだけです。山林で会える動物・植物・昆虫は運次第ですが、動物園の檻の前に行けば、お目当ての動物にいつでも会えます（自由を奪われ、淀んだ目をしながら、檻内を往復運動していることが多いですが）。我々の快感や精神充足の度合いは、同じ刺激に対して鈍化してくる性質をもっています。そのため、同じ快感を継続的に得るためには、刺激となる素材の量を増やすか、質を変化させなければなりません。時空間的に凍結された文明の刺激は、必然、量を増やす方向に走りがちとなります。時空間的に移ろう自然の刺激は、それ自体が質の変化を内包しています。文明の中では、我々自身で、五感を刺激する素材を探し求め、その量と質を増やしていかなければなりません。自然は、我々が何も手を下さなくても、それ自体が、大きな時空間的な循環の中で刻々と変化していきます。我々はただそこに同化して寄り添えば、五感を刺激するに十分な、多様で、変化に富んだ素材を手に入れることができるのです。自然同化によって幸福を追求する利点は、まさにこの点に集約されると言えるでしょう。